

有島安子『松むし』論 71首の短歌の分析・考察を中心に（その一）

片 山 礼 子

目 次

はじめに

- (一) 足助素一宛て書簡 —安子の短歌七首—
- (二) 吹田順助宛て書簡 —安子の短歌十首—
- (三) 有島安子の短歌と『或る女』との関係

はじめに

本稿は、有島武郎『或る女』と『松むし』に関する小稿を承けるものである。(注一) 有島武郎の夫人・安子（以下、安子）が、平塚杏雲堂病院に入院したのは大正四年一月である。遺稿集「松むし」には七十一首の短歌が所収されている。それらの短歌には、安子が入院当初の頃に詠んだ歌と死期が近づくとつれて詠む短歌のモチーフに変化が見られ、その違いを認めることができる。特に、本論文ではそうした短歌、そして「松むし」が『或る女』作品完成に多分に影響を与えていることに注目をし、それらに関与していると思われる短歌についての分析、考察を深めたい。

(一) 足助素一宛て書簡 —安子の短歌七首—

- 1 白百合の如き子なれば其胸に露や置くらむ母病みてより
- 2 微笑と涙の外に言葉なき小さき心の母恋うらしも
- 3 神かけて子等思わじと病む我れの誓いし日より世はかわり見ゆ
- 4 水銀が柳の枝をつぎへに伝い行くような春雨の昼

5 病院の松原に行く看護婦の白衣に小雨ふる夕かな

6 駿河舞女神が海に遊ぶ夜を星より見たし春の願事

7 君か子かいずれをえらみ抱くべきわがこの頃の弱き心は

(番号は引用者)

ここに示した短歌七首は、有島武郎が足助素一に宛てた書簡の中で、「平塚の病人は幸いに大変いゝ。此頃は少許の運動も許されて居る。此頃彼女の詠んだのにこんな歌がある。」と七首の短歌を記した。いずれもテーマが愛児に向けられたものや、病室という空間の中での安子の身辺に関わっている。

1 白百合の如き子なれば其胸に露や置くらむ母病みてより

この当時のことは、武郎の書簡で知ることができる。(注二) これまで安子は、子ども達と離れて生活をしたことがない。そんな安子の心の痛みが伝わる一首である。白百合の花のような清らかなわが子のことを思っている。吾子の心には、母がいないことへの淋しさや悲しみで、その胸いっぱい受けとめていることであろう。わが子のことを心配している安子がいる。ちなみに、安子の発病当時、長男、行光は四歳、次男、敏行は三歳、三男、行三は二歳であった。

2 微笑と涙の外に言葉なき小さき心の母恋うらしも

この歌は、わが子を案じている安子の気持ちが鮮明に浮かび上がる。「微笑」と「涙」は、形の上でははっきりと表れるが「言葉なき小さき心」には吾子を心配している母親の気持ちが安子の語りで詠まれている。幼な心にも母を慕う思いや切なさが伝わってくる。

3 神かけて子等思わじと病む我の誓いし日より世はかわり見ゆ

この歌も1、2と同様にモチーフは吾子に対してである。どうしてもわが子のが気にかかる。そう思わないと誓った日から、これまでとは違ったようにまわりのことが見える。安子の強い決意が伝わる。

4 水銀が柳の枝をつぎへに伝い行くような春雨の昼

病室から見える戸外の情景，春雨が降っている様子が，あたかもそれは，水銀が柳の枝を次々に伝えているようである。「水銀」という言葉が象徴的である。体調の不安定さを感じずにはいられない。同日であっても，体温の上下はめまぐるしい。この時期の安子の様子が窺われるような一首である。

この頃の安子の体調は武郎の書簡集から知ることができる。また、『松むし』の中では「水銀が柳の枝をつぎつぎに走り行くやうな春雨の晝」とある。（注三）

5 病院の松原に行く看護婦の白衣に小雨降る夕かな

ここに詠まれている情景を客観的に見つめながらも，安子の気持ちの中では不安や淋しさから逃れられないのであろう。それは「小雨降る」に表わされている。「松原に行く」の表現にゆるぎない生命の躍動を感じさせる。しかし，私の気持ちは小雨が降る夕方のように，なぜか気持ちが晴ればれとしない。沈んだ安子の胸の内だけが伝ってくる。

6 駿河舞女神が海に遊ぶ夜を星より見たし春の願事

この短歌も5で詠まれた歌と同様に躍動美を感じさせる。しかし，「生」とそれとは裏はらに「死」を連想させる一首である。「駿河舞女神が海に遊ぶ夜を」の上の句は視覚的に美しいイメージが浮かぶ。だが，四句目の「星より見たし」が気がかりである。おそらく，主体は安子であろう。結句の「春の願事」はその頃の安子の心境そのものであろう。

7 君か子かいずれをえらみ抱くべきわがこの頃の弱き心は

「あなた」か，「子ども」かと妻であると同時に母親としての揺らぐ心が伝わる。「この弱き心は」に安子の気持ちが投影されていよう。

ここでは，安子が発病し入院した頃の短歌について見てきた。鎌倉で静養の後，入院後も病状は一進一退をしながら闘病生活を送ることとなる。こうした状況は武郎の日記や書簡集からもわかる。また，武郎が吹田順助宛て書簡（注四）の中で，「妻の歌なるものを少々御慰みに御覧にいます」と十首の短歌が記されている。それらの短歌と入院当初の頃の短歌を比較してみてもその変化，違いがわかる。安子の亡くなる九ヶ月前の短歌についての考察を試みたい。

(二) 吹田順助宛て書簡 —安子の短歌十首—

- 8 死ぬと云う事さえ敢てふりむかず眠りてありや小さきわが魂
- 9 生も死も人のこの世の戯れと思入るまで思入りぬる
- 10 春追いて乙女心は旅に出て帰らねばこそ我れは老いぬる
- 11 砂漠行く人の如くにわが心今日も渴きてさすらえるかな
- 12 我が心朝の寝床に流れ入る秋風の如今朝は冷し
- 13 かくて我れいつまであらんはかなしと思う夜などの人の恋しき
- 14 生きとし生ける世の人悉く病めりなど思う淋しき夜かな
- 15 あわれなり瓶にさしたる秋の花枯れても散らず執着の如
- 16 臥しながら又栗喰居れば野を分けて秋の風行く何処に行くや
- 17 我兒等に似たれどかなし人形のつぶらなる眼はまたよきもせず

ここに、示された十首は安子が亡くなる九ヶ月前に提示されたものである。先に示された歌を受けて、それぞれの短歌についての考察をさらに深めたい。

- 8 死ぬと云う事さえ敢てふりむかず眠りてありや小さきわが魂

この短歌からは「死」と「生」の境界がないほど「死ぬこと」そのものを冷静に受け止めようとしている。いかにも自然に、「死」が近づきつつあることを冷静に受け止めている。

- 9 生も死も人のこの世の戯れと思入るまで思入りぬる

「生」と「死」をモチーフとしながら、自分の置かれている状況を客観的に見つめている。そうした心境の時間の経過を感じる。もちろん安子の中で諦めに似た気持ちがないわけではないが、これほどの境地に至るまでの道程を感じる。それは、病魔との闘いの中での内面での葛藤の末に得た安子の心境でもあったのだろう。

10 春追いて乙女心は旅に出て帰らねばこそ我れは老いぬる

春を待ちわびた乙女心、かつての浮きたつような心のときめきもどこかへ行ってしまった。安子にとって「春」は辛い季節といえる。ここでは、かつての自分と現在の自分を見比べている。おそらく病魔に冒されていない娘時代を懐かしんでいるのであろう。以前はあれほど「春」が待ち遠しかったはずなのに、とそんな安子の思いが伝わってくる。春を待ちわびた乙女心、かつての浮き立つような心のときめきもどこかへ行ってしまった。現在はそうではない自分自身を「我れは老いぬる」と客観視しているのである。（注五）

11 砂漠行く人の如くにわが心今日も渴きてさすらえるかな

この歌は、この当時の安子の心境そのものの表れといえよう。砂漠のイメージが、自分自身の現状と胸のうちを表出しているといえる。砂漠行く人のように私の気持ちもすっかり渴いてしまっている。そんな思いで彷徨し続けている。この頃の安子の心境そのものといえよう。

このように、「生」と「死」を意識し、そしてその狭間にありながらも、これまでとは違って遠くからその事実を客観視し、冷静に見つめられる安子が存在する。もちろん死に対しての怯えや不安から逃れたとは言いがたい。しかし、ここでは「死」をも受け入れられる安子の姿が認められる。

12 我が心朝の寝床に流れ入る秋風の如今朝は冷し

朝寝床に入ってくる冷え冷えとした秋風、それはあたかも今朝の私の気持ちのように、冷え冷えとした秋風、そうした底冷えが今の安子の気持ちと重なりあうのである。安子はこの現実をしっかりと受けとめようとしている。

13 かくて我れいつまであらんはかなしと思う夜などの人の恋しき

この歌も入院した頃の安子の短歌と比べてみると、詠んでいる歌の内容やモチーフに変化が認め

られる。例をあげるならば、「白百合の如き子なればその胸に露や置くらむ母病みてより」や「微笑と涙の外に言葉なき小さき心の母恋うらしも」のように、最初の頃詠みあげた短歌は歌の中心のテーマがわが子にあった。しかし、この頃になると、安子の詠む歌は、次第に我が子から、自分自身へとその対象は移行していく。

しっかりと自分自身と向き合っているながらも、安子の内面の揺れも見逃せない。入院した頃に詠んだ歌とは随分内容を異にしている。それは、これまで心情を直裁的に詠みあげている歌が多かった。しかし、次第に安子の詠む短歌は客観性を帯はじめる。

14 生きとし生ける世の人悉く病めりなど思う淋しき夜かな

この歌には「生きとし生ける」とあるように、「生きること」と「死ぬこと」を、自分自身の身近な事柄だけにとどまらず、より普遍的な人間の「生」と「死」を見つめていると考えられる。

15 あわれなり瓶にさしたる秋の花枯れても散らず執着の如

瓶に挿してある秋の花が枯れても散らずに存在している。生命の強さが「執着の如」と表現され、安子の生きることへの強い願望と生命力を重ね合わせることができる。そして、もう一点、ここでは具体的な花の名は記されていない。だが、武郎がこうした植物に目を向けていることは、作品を読む中でもよく理解できる。「信濃日記」に記した高山植物の名前の多さにも驚かされる。武郎にとって軽井沢は大きな意味を持つ。父親・武の別荘「浄月庵」があったことも理由の一つにあげられる。また、武郎は北海道の気候や風土が軽井沢と良く似ていることをあげている。土の性質が違っていても、植物の生育については非常に類似性があると武郎は述べている。大正六年に発表された『実験室』は軽井沢で書かれた作品である。この作品は同時期の戯曲『死と其の前後』とともに、『或る女』の作品にも大いにかかわりがある。

16 臥しながら又栗喰居れば野を分けて秋の風行く何処に行くや

この短歌が詠まれたのは、季節は秋である。おそらく病室でのことであろう。この時期の安子の状況を窺わせる。当時の安子の心境が詠まれている。ベットに横たわりながら、栗を口にしていると野をかき分けるように秋の風が吹いている。どこに行くのであろうか。

また、この頃、武郎も安子を元気づけるために近況にふれ、折々短歌を葉書に記して送っていることも見落とせない。このことは、安子が詠む短歌のモチーフと無関係とは言い難い。

17 我兒等に似たれどかなし人形のつぶらなる眼はまたゝきもせず

この短歌も同様のことが言えよう。安子は入院してからも、子どものことを思わなかった日は一日もなかったであろう。我が子に似た人形、心が躍ったに違いない。しかし、そうした気持ちも束の間のこと。哀しいけれども、我が子に似たその人形の可愛らしい眼はまばたきをしない。あたりまえのことだと認めていながらも、その現実と向き合っている安子の情緒に触れることができる。

ここでは、先に示した短歌と比較して「死」への連想がさらに深まっている。8の短歌にしても9の歌にしても共通しているテーマは「生」と「死」に関わっている。8の短歌では「死ぬと云うことさえ敢てふりむかず」と「死」と「生」との境界がなく、いかにも自然の状況の中にいると考えられる。「死」が近づきつつあることをそれとなく暗示している。9の短歌では「生」と「死」が正反対の範疇の事柄であるにもかかわらず、ここでは、いずれも「世の戯れ」と客観視している。12の短歌については、安子は武郎と結婚をして、北海道で生活をした六年間のことが重なりあっているのであろう。秋風が吹く頃の、早朝の冷えびえとした冷たさを安子は身をもって感じている。北の地での晩秋から真冬にかけての冷たさは格別なのである。14の歌についても、入院した頃の安子の短歌と比べてみると、詠んでいる歌の内容やモチーフに変化が認められる。初期の頃の短歌の中心のテーマが自分の事よりわが子にあった。しかし、この頃になると、安子の詠む歌は、次第にわが子から、自分自身へとその対象が移行していく。

また、有島武郎が吹田氏に宛てた書簡の中で示した十首の短歌は、明らかに安子が入院当初に詠みあげた短歌の内容、モチーフに違いを認めることができる。

そうした意味でも、安子の闘病生活は詠む歌の内容やモチーフに変化がみられ、有島武郎の作品に影響をもたらすこととなる。

（三） 有島安子の短歌と『或る女』との関係

ここでは、(一)、(二)でとりあげた短歌以外の歌で有島武郎の代表作『或る女』に影響を与えていると思われる短歌を中心に考察を深めたい。特に後篇で描かれる主人公、早月葉子の表象との関わりである。周知のように、『或る女』は、はじめ『或る女のグリンプス』と題して、明治四十四年一月から大正二年三月まで『白樺』誌上に連載され、前篇二十一章を書き終えた時に、擱筆した。その後、約六年間の空白を経て、後篇が一気に書きあげられる。

死の淵に彷徨する有島安子が詠みあげた短歌の中には、『或る女』の早月葉子をイメージさせる短歌がある。

18 おそろしや心の底に女の魔ひめて我をば我はあざむく

19 人ふたり住むかと思ふわが胸のこゝろの宮にあらそい絶えず

20 女とは實にもすだまのなれる果てわれうとましき日もまじるかな

ここに示した短歌には、これまで掲げた短歌とも違う異質な世界がある。安子自身の体調の変化もあろうが、それにしても二律背反、相矛盾した内面が読めるのである。他にも、

21 月見草露草などをなつかしむさだめをうけて生まれしならねど

22 おきてなく空飛ぶ鳥に似し心明日はいつこに誰を見るべき

21、22は先に示した三首のモチーフとも違いはある。しかし、いずれの歌にも共通しているテーマは不安定な胸の内である。

また、「松むし」所収の安子の短歌には、短歌の言葉のみに表れた解釈だけでよいのだろうかと思われる歌がある。そうした短歌を何首かあげてみよう。

23 神と魔の心に住めばキリストの悲しみさえもわれは知らでや

24 おぼろ夜の森の中ゆえわが胸の秘事君にかたるにはよき

25 夢の国国の浦曲の夕月夜恋してぞわがさまよい見たる

26 許しませ君の笑顔のたゞ見たく心にそむき偽をいう

27 君恋て病む人妻は世も捨てぬいつ息たえんなど云いてこし

28 花園の小さき王よなが夢の笑顔に母は乙女を捨てぬ

29 うつらへ おぼろ夜の国夢ざかいまよい入りつゝおさなごの笑む

30 夢にだに見もせすぎし恐ろしの国に住えりわれ病みてより

ここに、示した短歌は、主に「夢」と現実の狭間のなかで詠みあげた歌とも解釈できる。しかし、27の歌は主体を安子とすると、結句の「云いてこし」に矛盾が生じてくる。このように伝えてきたのは誰なのかという疑問である。他にもどのように解釈を加えたらよいのか考察をしなければならぬ短歌にであらう。つまり、ここで考えられることは、安子の短歌に有島武郎の意図も多少影響しているのではないかという点である。他に、(注三)、(注五)で示したが、書簡で提示した短歌と「松むし」所収の短歌を比べてみると、13首の表現の違いを認めることができる。(注六)また、一連の安子の短歌にふれるにつれ、「松むし」と『或る女』は切り離すことができない。なぜなら、『或る女』のヒロイン早月葉子の表象と関連があると考えられる。こうしたことも視野に入れ、今後「松むし」所収71首の短歌をどのように位置づけるのか、『或る女』をはじめとする一連の有島武郎の作品を読み解く上でのキーワードが関与していると考えられる。

注一 北海道教育大学紀要第五十四巻第二号

注二 一九一五年二月二十五日足助素一宛て書簡

注三 「松むし」では「水銀が柳の枝をつぎへに走り行くやうな春雨の晝」と表現されている。

注四 一九一五年十一月十七日於東京吹田順助氏宛て書簡

注五 「松むし」では「春追ひて乙女心は旅にいで歸らねばこそわれはふけぬる」と表現されている。

注六 注三、注五で示した歌以外に、「松むし」では次のような表現になっている。なお、傍点は異なっている箇所である。(傍点は引用者)

1 白百合に似たる子なればその胸に露やおくらむ母やみてより

- 2 ほゝゑみと涙の外に言葉なきちさき心の母恋ふるかも
- 7 君か子かいづれを先きに抱くべきわがこのごろの弱き心は
- 9 生も死も人のこの世のたはむれと思ひ入るまで思ひ入りにし
- 11 沙漠ゆく人の如くにわが心けふもかはきてさすらへるかな
- 12 わが心めざめし閨にながれ入る秋風のごと今朝はつめたし
- 13 かくてわれいつまであらんはかなしと思ふ夜などの人の戀しさ
- 14 生きとしも生ける世の人悉く病めりなどおもふさみしき夜かな
- 15 あはれなり瓶に活けたる秋の花枯れても散らず妄執の如
- 16 ねながらに栗喰み居れば野を分けて秋の風ゆくいづこにゆくや
- 17 わが子等に似たれどかなし人形のつぶらなる眼はまだゝきもせず